

第7回日本応用藻類学研究会春季シンポジウムの開催に際して

日本応用藻類学研究会会長 能登谷 正浩

本研究会は発足以来8年目、春季シンポジウムは7回目を迎えました。昨度までは日本海藻協会内の研究会として活動を行ってまいりましたが、日本海藻協会からの分離に伴い、本年からは独立した学術組織として歩み出すこととなりました。これを受け、学術雑誌「Algal Resources」を発刊するとともに、本春季シンポジウムもテーマ講演とパネルディスカッションに加え、学術発表(口頭およびポスター)を行なうなど、学会化へ向けて発展を図ってまいりました。本研究会会員およびこの活動にご賛同いただけます方々には、より一層のご支援、ご協力を賜りたくお願い申し上げる次第です。

本第7回日本応用藻類学研究会春季シンポジウムは、本日の午前中と午後の一部時間で、学術発表として「口頭およびポスター発表」が行なわれます。会員皆様の研究成果について忌憚りの無い意見交換がなされ、有意義な研究交流の場として活用できればと願っております。

「講演とパネルディスカッション」では、近年特に注目を浴びている「海藻バイオ燃料」について取り上げました。バイオ燃料は、地球大気中の二酸化炭素を含む温室効果ガスの濃度上昇に伴う温暖化の防止や保全のため、化石代替燃料としての生産を目的としています。また、その背景に人間活動の社会、経済的な課題が地球環境全体へ大きく影響しており、特に浪費的・投機的経済が大きなインパクトを与えていることを浮き彫りにしています。この対策としては、これまで造林や森林伐採防止による炭素蓄積量の増大、化石燃料使用の抑制や二酸化炭素排出を伴わないエネルギー生産の技術開発が進められる中で、再生可能な資源利用としての、カーボン・ニュートラルなバイオ燃料生産への志向が高まっています。その中で、当初は農作物や穀物を利用した生産がなされてきましたが、極最近になって、穀物の投機的経済や地球規模の食糧不足問題から、それらには極めて厳しい批判の目が向けられてきています。結果として、国内外でも食糧と競合しないバイオ燃料資源の開発の意向が強まっています。これらの現状を踏まえ、本日、日本応用藻類学研究会が主催するシンポジウムで「海藻バイオ燃料」を課題としたことについては時宜にあって大きな意義を持つものと思います。本シンポジウムでは、バイオ燃料に海藻を利用する意味やこの研究開発の視点や考え方などともに、メタン発酵や水素発酵などの具体的な研究事例を含めてご講演をお聞きし、それらを踏まえて、海藻バイオ燃料の開発意義と今後の展望について論議がなされることを期待しております。

本シンポジウム恒例の懇親会は、研究発表およびシンポジウムにご参加いただきましたご講演者や各課題発表の研究者を含め、直接の意見交換や歓談が出来る場です。ご参集の皆様方には応用藻類学に関する情報と人的交流の場として、また、今後の研究方向を考える場としてよい機会となるものと思います。多数のご参加をお願い申し上げます。